

令和 6 年 度 自 己 評 価 表

鳥取県立米子東高等学校校定時制課程			
中長期目標	1 人間理解のできる生徒の育成 人間の強さや弱さ、尊厳を深く理解し、自分と異質のものの存在を認めながら、共に関わり共に生きる共生の精神を持つ生徒を育成する。 2 課題意識のある生徒の育成 知的好奇心、科学的探究心と課題解決能力を育て、自身や社会に常に意識を持って自主的・積極的に学習し、自らの成長と社会への貢献を志す生徒を育成する。 3 自己表現のできる生徒の育成 他人の意見に対しては率直に受け止め、自分の意見を論理的に明確に表明できるコミュニケーション能力を持った生徒を育成する。	今年度の 重点目標	1 自己実現に向けた教育の充実 2 豊かな人間性の育成 3 社会人としての意識の高揚 4 働き方改革の推進

年 度 当 初				評 価 結 果(最終)			
評価項目	評価の具体項目	現 状	目 標(年度末の目指す姿)	目 標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 自己表現に向けた教育の充実	主体的な学びによる基礎学力の定着	○授業評価アンケートの最上位項目が「わかりやすい」 7 6 % 「先生の熱意を感じる」 7 8 % ○授業の自己評価 5 段階評価で 4 以上 7 9 % ○教材が工夫されていてわかりやすい 7 6 %	○わかる授業を推進 授業評価アンケートの最上位項目が「わかりやすい」 8 0 %以上 「先生の熱意を感じる」 8 0 %以上 ○授業の自己評価で 4 以上 8 0 %以上 ○I C T を効果的に活用 8 0 %以上	○授業公開および授業評価アンケートを活用した授業改善 ○各教科でのルーブリックの活用とパフォーマンス評価の実施 ○授業の中で、Chromebookを積極的に活用	○わかる授業を推進 1 2 月授業評価アンケートの結果、最上位項目が「わかりやすい」 6 5 % 「先生の熱意を感じる」 7 0 % 「授業の自己評価で 4 以上」 7 3 % 「I C T を効果的に活用」 5 1 % ○授業公開を継続的に実施 ○ルーブリックを活用した評価を実施 ○Chromebook環境整備、授業で使う機会は増加	C	○授業アンケートから生徒の具体的なニーズや課題を把握し、授業改善につなげる。 ○公開授業では観察の視点を明確にした参観を行う。 ○授業に積極的に参加する生徒を増やしていく。ルーブリックにより、生徒の主体的な学習活動を適正に評価する。 ○I C T 支援員の助言を得ながら授業でのChromebook活用に努める。また、授業で使えるアプリの操作について研修する。
		特別支援教育の充実	○S C、S S W との連携 ○教職員の特別支援教育に対する意識の向上 ○生徒情報交換会、ハイパーQ U 研修会を実施するとともに、生徒情報を共有して支援に役立てた。 ○特別支援教育支援員・米東サポーターの配置により、授業サポートを実施した。	○S C、S S W と 2 週間に 1 回ケース会議を実施 ○生徒情報交換会、ハイパーQ U 研修会に加えて教員向け研修を実施 ○特別支援教育支援員の支援活動計画を更新	○生徒情報交換会、ハイパーQ U 研修会または日々のタレ、終礼で、生徒情報の共有を行い、支援に役立てた。 ○S S W の月 2 回の定期訪問に合わせて、S C と支援部、担任でのケース会議を行い、関係機関とも連携して生徒支援にあたった。 ○特別支援教育に関する研修はビデオ視聴で実施した。 ○米東サポーター・特別支援教育支援員がきめ細やかに支援記録をし、それを教職員に還元して指導に役立てている。	B	○教職員の特別支援教育に対する意識の向上に向けて、効果的な研修会が開けるように次年度は早い段階から検討していく。 ○関係機関との連携を学校が主体的に行う。 ○職員間の情報共有では、回覧するだけでなく、特に気になることはタレ、終礼で共通理解を図る。
	進路指導の充実	○令和 5 年度卒業生は就職 5 名、進学 4 名、その他 5 名であった。 ○学年、進路指導部、C A で連携して指導を行うことができた。ハローワークと連携した就職指導も効果的であった。 ○進学希望者向け業者テストを延べ 3 名が受験した。	○就職内定率及び進学決定率 1 0 0 % ○C A、ハローワークと連携 ○進学希望者向け業者テストを延べ 4 名以上受験。	○L H R、進路講演会、個人面接による就職・進学に対する心構えの徹底指導 ○C A による進路指導講話、進路面談の実施 ○生徒・保護者に進路情報を伝達	○就職希望者 7 名中 6 名、進学希望者 1 名中 1 名がそれぞれ内定、合格した。 ○企業学校見学、進路講演会で進路情報を生徒に伝えた。 ○C A による進路面談回数は延べ 3 9 回、L H R における指導回数は延べ 8 回であった。 ○ハローワークとの連携では、就職希望者 2 名が就職相談・志望理由作成指導を受けた。 ○進学希望者向け業者テストを延べ 3 名が受験した。	B	○見学、講演会を有効に活用して、生徒に進路情報を伝えていく。また、保護者への進路情報の確認も行う。 ○応募書類の作成および提出締切に苦慮する生徒には、進路指導担当、学年団で連携して指導する。 ○基礎学力をいかにして養成するかが大きな課題である、教科と連携して個別指導等を行い、進学希望者向け業者テストに挑戦する生徒を支援する。
	キャリア教育の充実	○生徒は、キャリア・パスポートに講演会等の振り返りを記録した。記録する内容を深めていく。 ○地元企業・学校見学を通して、生徒自身にキャリアデザインについて考えさせている。	○キャリア・パスポートの有効活用 ○キャリア意識の醸成	○キャリア・パスポートに、講演会・行事の振り返りを記入 ○3 年間を通して生徒自身のキャリアデザインを構築	○各種講演会において生徒の感想や学びの足跡を記録させ、キャリアパスポートの内容を充実させた。 ○生徒が書いた感想等に対して、担任ならびに進路指導担当者で小まめにコメントのフィードバックを行い、生徒の成長に繋げることができた。 ○振り返りを記入する習慣が身についた。	A	○来年度も同様の形でキャリアパスポートを作成させ、生徒自身の自己把握や自己変革を促していきたい。 ○担任ならびに進路指導担当者で小まめにコメントしていく。 ○記述量が増えている生徒については、内容も深まるように指導する。
2 豊かな人間性の育成	生徒会・部活動の活性化	○生徒会執行部を中心に大運動会の企画・運営を行い、初めてグラウンドで開催することができた。 ○全国定時制通信制総合体育大会にバレーボール男子、バドミントン女子が出場した。	○生徒会活動や部活動、学校行事での生徒の主体的な取組の推進 ○部活動の推進	○生徒会活動のなかで、リーダーの育成 ○学校行事・部活動において、生徒が主体的に活動する機会を増強 ○学校 H P の更新回数を増やす	○定期的に執行部会を開き、学校行事の企画を行った。 ○生徒会執行部の生徒が中心に球技大会の企画・運営を行った。全校生徒が学年の枠を超えた交流を楽しんだ。 ○県総体や県生連大会に向けて、部活動週間を設定した。 ○バレーボール男子団体と卓球女子個人が全国大会出場を果たし、バレーボールが全国大会で 1 勝をあげた。 ○学校 H P の更新回数は昨年度より増加した。 ○部活動の活躍は米東日より等に掲載した。	A	○生徒会執行部、部活動において、生徒の主体的な活動を進めてリーダーの育成に繋げる。 ○生徒会行事に参加する生徒の姿勢が素晴らしい。このことも継続して指導する。 ○生徒会行事、部活動について H P にあげている、実施後 1 か月以内に H P 用の記事を準備して更新時期が遅れないようにする。
		興味・関心を喚起する体験的活動の実施	○行事を苦手とする生徒もいるが、人との関わりを通して成長できるように進めている。 ○芸術鑑賞や地元の資源体験を通して、郷土への興味と関心を深めることができた。	○体験的な活動による豊かな心の育成 ○地域に根ざした教育活動	○新たな体験活動の充実 ○体験を通して、地域の魅力を伝える	○5 月に演劇鑑賞を実施した。初めて観劇する生徒も多く、舞台芸術への興味・関心を持たせることができた。 ○7 月にカヌー体験（1、2 年次生）乗馬体験（3 年次生）を実施し、自然の中で貴重な体験をした。 ○地元資源体験ではビザ体験後、大山自然歴史館を訪問して大山の自然と歴史に触れることができた。	B
	人権感覚豊かな生徒の育成	○生徒向けの人権教育講演会を 2 回実施した。 ○人権 L H R での話し合い活動で、他者の様々な意見に触れる機会を持った。	○各領域での人権意識の育成 ○お互いが安心できる集団の形成	○生徒向けの人権教育講演会を 2 回実施し、加えて教員向けの研修も実施 ○人権 L H R での話し合い活動を増やす	○1 0 月に「ノーマライゼーション」についての講演と、車いすバスケの体験を実施。 ○1 1 月に人権教育職員研修を実施。 ○1 月に、性の多様性についての講演会を実施した。L H R の話し合い活動については、生徒の実情に合わせて行うことができた。	B	○アンケートで生徒の実情を把握し、人権講演会および L H R を計画する。 ○教員向けの研修を実施する。 ○人権教育 L H R での話し合い活動の時間を設定する。
	社会参画できる生徒の育成	○定通教育充実事業を通して、社会に対する理解を深めている。 ○講演の際、人の話を聞く姿勢が向上した。また、講演後の感想もきちんと記入できる生徒が増えてきた。	○社会人としてのマナーを身に付ける ○人の話をきちんと聞いて、自分の意見を考えることができる生徒の育成	○異世代と交流の機会を 1 年次生徒に設定 ○講演会のときに「きちんと聞いて、きちんと考えて、きちんと書く」ことを指導	○子どもに対する苦手意識を持っている生徒が多かったが、保育実習に非常に前向きに取り組む自信を深めることができた。 ○講演会を聞く姿勢は概ねよかった。講演後の感想文は教職員で共有して指導に活かした。	B	○1 年次生全員と 2、3 年次生の選択者を対象に保育実習を継続する。 ○行事、講演会等で外部の人と関わる機会を設定する。 ○事後の感想文を教職員で共有して指導に役立てる。
3 社会人としての意識の高揚	規範意識の醸成	○問題行動件数 2 件。生徒指導を徹底し、生徒は落ち着いて学校生活を送っている。 ○出席することに意識が希薄な生徒がいる。令和 5 年度は 1 年間皆勤 0 名、精勤 2 名であった。	○落ち着いた教育環境の維持 ○問題行動発生件数 3 件以下 ○1 年間皆勤及び精勤 5 名以上	○挨拶の励行、生徒への日常の声かけの実施 ○安定した生活習慣の継続を指導 ○教職員間の情報交換、保護者との連携	○気持ちの良い挨拶ができる生徒が増加。 ○問題行動は 1 件あった。言葉の認識の相違からトラブルになるケースがあった。 ○1 年間の皆勤及び精勤は 5 名である。長期休業明けから、生活リズムを崩す生徒が見受けられた。	A	○挨拶指導、生徒への声かけを継続する。 ○終業式、始業式など節目のタイミングで、あらためて社会性について問題提起する。 ○長期休業前後の集会において生活サイクルの見直しを図るよう指導する。長期休業明けに身だしなみ確認を実施する。
		家庭との連絡の緊密化	○担任を中心に、こまめな家庭連絡を継続し、無断欠席については、昨年度より減少した。 ○けじめあるスマートフォンの利用ができるよう指導している。	○欠席の多い生徒を減少させる ○保護者の学校理解を促進	○面談・カウンセリングの実施 ○保護者面談の実施、こまめに保護者連絡 ○学校 H P 等による学校の教育活動の発信	○欠席の多い生徒の割合は減少したが、一部の生徒の欠席が多い。教職員での情報共有、保護者連絡は適宜行った。 ○S C との全員面談を実施。継続面談のほかに気になる生徒にカウンセリングを勧めている。不登校生徒の保護者にもカウンセリングを勧め実施した。 ○S C とのコンサルテーションを実施している。 ○学校行事について H P に掲載した。	B
	【体】育、【食】育の推進	○生活習慣に関するアンケートを年間 3 回実施した。 ○「食」の講演会を実施、朝食を食べる生徒が 5 0 %から 7 0 %に増加した。 ○睡眠が十分でないと感じている生徒の割合 4 8 %	○生徒の健康に対する意識の向上 朝食を食べる 7 0 %以上 睡眠が十分である 6 0 %以上	○生活習慣に関するアンケートを年間 2 回実施 ○「食」の講演会・定時制夜間給食の実施 ○睡眠に関する保健指導・啓発	○生活習慣アンケートから朝食の摂食率は約 85 %、睡眠が十分と回答したのは約 45 %だった。 ○食の講演会ではアンケート結果や生徒の質問を取り上げ話をしてもらった。生徒は食の大切さを再認識できた。 ○生活習慣について H R で指導した。	B	○生活習慣アンケートを実施して、結果をもとに食事、睡眠を中心に生活習慣について継続して指導を行う。 ○行動の改善や正しい知識の定着のためには、保健部と学年団が連携し、継続して指導していく。 ○学校行事等で楽しく食事をとる機会を設定する。
	よりよい学習環境の整備	○清掃月間を設定して校舎の環境美化に努めた。 ○ゴミの放置が散見されるので、ゴミの持ち帰り・分別を粘り強く指導していく。 ○学習椅子の騒音対策の活動が行われ、学習環境の整備ができた。	○校内環境の整備 ○H R の時間に生徒と教員で清掃活動	○ゴミの持ち帰り・分別を指導し、ゴミの減量化に繋げる ○清掃活動の継続	○ゴミの持ち帰りは概ね出来ている。 ○H R の時間に生徒と教員で清掃活動の時間を設定した。清掃活動は全員が真面目に取り組むことができた。 ○生活習慣について H R で指導した。	B	○日常でのごみ拾いや片付けをする意識づけをする。 ○ゴミの持ち帰りを引き続き徹底する。 ○今後も清掃活動の時間を設定し清掃活動を継続する。
4 働き方改革の推進	業務の効率化	○学事支援システムの導入により、成績処理にかかる時間を大幅に削減できた。 ○分掌のフォルダ、ファイルの整理を進めて、次年度の業務引継ぎ等に役立てる。	○円滑な業務の遂行 ○時間外業務の縮減	○学事支援システムの有効活用 ○分掌内における業務分担の見直し ○分掌内のフォルダ、ファイルの整理	○学事支援システムを日々の出欠管理や成績処理に活用している。 ○分掌を主査 1 名、副査 3 名体制で進めた。主査に仕事が集中することを解消していきたい。	B	○学事システムでは講座、クラスともに「日々入力」を確実に行う。 ○分掌の打合せを定期的に行い、分掌内の連携を図る。

評価基準 A：十分達成 [100%] B：概ね達成 [80%程度] C：変化の兆し [60%程度] D：まだ不十分 [40%程度] E：目標・方策の見直し [30%以下]